



対談 ハービー・山口氏

三宅善夫・天海由佳子

2018年1月4日、写真家ハービー・山口さんとの対談が実現した。ロンドンに10年ほど在住していた三宅理事長のかねてからの希望がかなったものである。

ハービーさんは1950年生まれ、東京経済大学卒業後、渡英。著名ミュージシャンと交流し、松任谷由実、福山雅治等、数々のアーティストの写真集やCDジャケットを手掛けた。2011年には、日本写真協会作家賞を受賞。大阪芸術大学、九州産業大学での講義、エッセイやラジオでの活躍等、多才である。TV「徹子の部屋」にも出演した人気写真家の一人だ。

ロンドンの写真集には、婚約発表前のダイアナ元妃の写真が載っている。まだパパラッチがない頃、愛車に乗り込もうとするところを撮影したもので、美しい横顔が印象的な一枚だ。ブライトンで通りがかった学校の学生を撮影しようとした時には、教師から撮影はダメと言われたが、ずっと待っていたら「いいじゃない、私達気にしないわ。どうぞ。」と学生達が中に引き入れてくれたという。はにかみながら笑う彼女達の表情は生き活きとしている。

三宅理事長とは同じ頃にロンドンに住んでいたことから通りや建物、お店の名前が次々と上がり、対談は大いに盛り上がった。

ハービーさんはエッセイ「女王陛下のロンドン」、写真集「LONDON AFTER THE DREAM」、「You can click away of whatever you want : That's PUNK」を出版するなど、イギリスには縁の深い方だが、RPSにはまだ入会されていなかったもので、これを機にぜひ、とお誘いした。



ハービーさんと愛機ライカ 撮影 三宅善夫

人を幸せにする写真を撮りたいというスタンスどおり、柔らかな口調で、とても温かみを感じられるお人柄だった。昨年は写真集他を3冊出版し、精力的に活動されている。

ハービーさんはライカを愛用しているが、たまたま同じお店にいらしていたライカカメラジャパンの社長をご紹介いただくなど、思いがけない収穫もあった。短い時間ではあったが、充実したお話を伺うことができた。

◆対談後のハービーさん◆

2月17日～25日、写真展「LAYERED」が原宿BOOKMARK 地下ギャラリーにて行われた。被写体と写り込みとの組み合わせをテーマにした写真展で、同名の写真集も出版された。



写真展の様子 撮影 三宅善夫

初日にお伺いしたが、大変な盛況だった。オープニングレセプションでは、シャンパンとヴァイオリン他の生演奏の中、ハービーさんのご挨拶があった。

当日はサイン会も行われ、長蛇の列。一人ひとりと気さくに記念撮影に応じながら、にこやかに話をする姿が印象的だった。

3月には、写真集「TIMELESS IN LUXEMBOURG 1999-2017」の出版を記念して、大丸他で写真展・トークショーが開催された。

かつて1999年、ルクセンブルク公国大公夫妻訪日に合わせ、ハービーさんのモノクロ写真展が行われた。2017年は日

本と同公国の外交関係樹立90周年という節目の年で、大公殿下が国賓として来日した際、皇居における宮中晩餐会にハービーさんも招かれた。

今回はデジタル・カラー写真にて、この約20年の変貌を辿ることに。建築や風景もさることながら、そこに暮らす人々の姿を通じて、小さな国を日本人に知ってもらうことが目的だ。言葉では語りつくせないことを写真で伝える。約60点の写真集だが、人物を得意とするハービーさんならではのふんわりとした奥行き感がある。

5月14日から1週間、今度は表参道駅にハービーさん撮影の写真がずらりと並んだ。某企業の広告で、300人の社員のポートレートを撮ったもの。この撮影時の様子も雑誌に取り上げられ、話題になっている。

どちらかといえば小柄なハービーさんだが、多才なご活躍を垣間見て、そのエネルギーがどこから出てくるのだろうかと思嘆。写真の新たな可能性を感じ、大いに触発された数ヶ月だった。



ハービーさんと三宅理事長

支部理事会開催報告

2017年12月3日(日)、田村暉明理事ゆかりの東京築地・つきち田村にて、理事会が開催された。



長崎・下関写真展の報告、ニュースレターについての意見交換の他、事務関連諸手続についての報告が行われた。また、ロールスロイス撮影会時の各自の写真が披露され、大いに盛り上がった。

その後、つきち田村特製のお弁当をいただきながら、和やかに忘年会が行われた。

(撮影：高木 陽光)



一近況報告一 林喜一理事

林喜一理事は日本のデジタル写真の先駆者として、長年にわたり、全日本写真連盟本部理事他、数々の写真コンテスト審査員を歴任。自ら主宰する写真教室の他、地方でも撮影指導を行い、多くの後進育成に当たってこられた。ネパールをはじめ、海外撮影歴も豊富。また写真の他、絵画・書道等を含めた埼玉県美術家協会で副会長を、同協会の写真部会では会長を務める。RPSJのHPやブログ担当としても活躍されてきた。

ご自身の開催する写真教室は、この春から新しい事務所に移転。「少数精鋭で、次世代のデジタル技術指導者育成に注力したい」とエネルギーに語る姿は、ご年齢を全く感じさせず若々しい。新事務所の益々のご発展、林理事のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



弘前にて撮影指導 撮影 辻栄一

RPSスイス支部 カーショウ氏来日

三宅 善夫

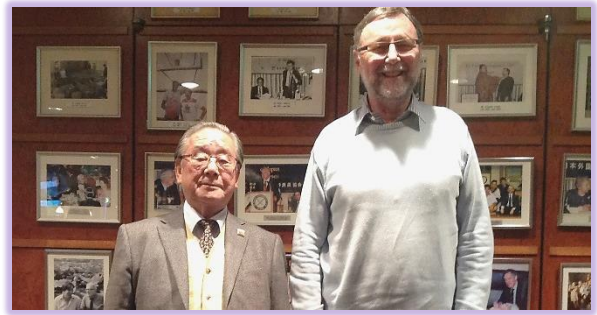
RPS スイス支部代表、ロバート・カーショウ氏 (Mr. Robert Kershaw) が来日され、2018年1月15日午後6時、有楽町外国特派員協会にてお会いした。

カーショウ氏は、今回、ご自身の経営するアフィリオン会社「コンサルタンシーカンパニー」のビジネス展開のため、日本、香港、シンガポールその他を訪問された。日本には1月11日～18日に滞在、沖電気、ゼロックス、提携先ジェットグラフ株式会社他訪問の間、15日夜のみ空いているとのことで、急遽、単独でお会いした。

同氏は、日本スイス外交樹立150周年の記念行事として、RPS スイス作品との合同写真展を開催の際、お世話になっている。その時の代表者、リチャード・タッカー氏がスイス支部代表を辞任し、RPS 本部海外支部担当役員に専念することになった為、カーショウ氏がスイス代表に就任された。

スイス支部は会員40名で、アクティブメンバーは15人。毎月会員の写真を一枚メールでドロップボックスに提出し、作品を巡回し、それぞれがコメントし合う。写真展はチューリヒその他で開催しているとのこと。

スイス支部の世話役は、会長、総務、会計など3名の役員の交代制で運営している。事務所はカーショウ氏の事務所を提供し、会費は写真展その他その都度各人が支払い、定額の



三宅理事長とカーショウ氏

年会費は徴収していない。RPSJについては年会費15000円は妥当だというご意見だった。

カーショウ氏は65歳、RobCK社(写真販売会社)を持ち、スイスに居住。旅行を通じ、都市、構造物、線形、パターン、人物などを撮影、パートナーと共に写真を公開している。

ちなみに同氏は1982年から4年間、以前の会社(イルフォード社)勤務当時、日本にいたことがある。サッカー、ラグビー、クリケットで横浜クラブに所属していたそう。スイス在住だがリバプール出身の英国人、写真はリバプール大学時代から続けているとのこと。

当方から、スイス支部と日本支部のコラボで写真展を開催してはどうかと提案したが、「残念ながら即答は出来ない」とのことだった。同氏とは今後も友好関係を持続して行きたいと考えている。

一写真展紹介

高円宮妃殿下写真展

2018年2月23日～3月4日、横浜美術館にて、【特別展示】「旅する根付 高円宮妃殿下写真展と現代根付コレクション」展が行われた。

根付は印籠などを着物の帯から下げるための留め具で、彫刻・蒔絵等が施された日本の伝統工芸品である。高円宮妃殿下は根付収集の傍ら、それぞれの根付にふさわしい場所を背景に撮影、「旅する根付」シリーズとして発表されている。“江戸時代は持ち主と一緒に各地を旅していた根付が飾り棚におかれたままでは不憫”と持ち歩くようになられたのがこのシリーズのきっかけだそうである。

ガラスケースに陳列された4～10cm程の根付はもちろん美術工芸品としての価値があるが、写真となるとまるで命を吹き込まれたかのように生き生きと見える。

佐渡の田んぼを背景にした朱鷺の根付、稲穂の中の雀やスマレの下の蛙の根付のように、縁ある地や季節感ある背景の中で撮影された姿を見ると、もう一度ケースの中の根付をじっくり眺めたい。中には島根県“鶉鷺(うさぎ)”地区で撮影されたウサギの根付のようにひねりをきかせたものもあってなかなか奥深く、見応えのある素晴らしい写真展だった。

妃殿下が根付に会われたのは、英国留学時代にご覧になった大英博物館やヴィクトリア&アルバート博物館の根付コレクションだったとのこと。故・高円宮殿下は学習院大学の写真部ご出身でいらしたが、妃殿下も英国留学時に写真部に所属されていた。

バードライフ・インターナショナル名誉総裁を務められる妃殿下は野鳥の撮影でも知られ、鳥は望遠、根付は接写と、異なる視点で撮影に取り組みれている。ご著書「レンズを通して」(中央公論新社 2017年)は、雑誌に掲載された鳥と根付の写真とエッセイをまとめられたもの。写真展を見逃した方にもぜひお薦めしたい。(天海由佳子)

～イギリス便り 2～ 湖水地方

天海 由佳子

2017年、イギリスの湖水地方がユネスコの世界遺産に認定された。1987年に“複合遺産”として、1990年には“文化遺産”として検討

されたが見送られ、2017年に“文化的景観”基準が認められて登録に至ったという経緯がある。ユネスコの声明によれば「湖水地方の特別な重要性は社会、経済、文化、環境各面の影響が相互に作用しているところにある」という。



撮影 天海由佳子

U字谷やカール等の氷河地形と多くの湖、ローマ時代から続く牧畜と石垣、スレートの街並と庭や畑は、ワーズワースやピアトリクス・ポターの創作活動の舞台となり、自然保護活動が盛んになっていった。

湖水地方の玄関口、ウィンダミアは濃い灰色のスレートの建物が並び、落ち着いた印象だ。湖をフェリーで渡り、ニアソーリーにあるポターの家・ヒルトップへ向かう。2016年はポター生誕150周年に当たり、渋谷のピーターラビット展でも多くの原画が展示された。その時に見なかった原画（おそらくはポターの一番のお気に入りの）が数枚と、文具や家具がヒルトップに展示してある。窓のそばに置いてある絵本にはくねくねした坂道が描かれているが、窓の外にはそのとおりの道が見える。ポターは赤いポストやお店など、家の周囲の風景をいくつも絵本に織り込んでいる。羊と牧草地を眺めているだけで、バス待ちの時間ですら癒しの時間になるようなのかなどかなところだ。



左：ポターの家、ヒルトップ

右：絵本にも登場するカフェ 撮影 天海由佳子

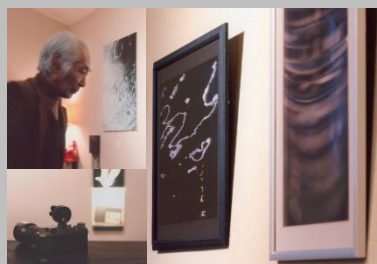
世界初のキャラクタービジネスといわれるピーターラビットで成功したポターは、農場主として羊を飼育する地主でもあった。自然保護に熱心だった彼女は4000エーカー以上の広大な土地をナショナルトラストに寄贈したので、このどかな環境が守られた。湖水地方は1951年にナショナルパークに指定され、今回の世界遺産登録につながっていく。

いくつもある湖はそれぞれ雰囲気異なる。大学時代、英国留学していた恩師が、イギリスのナショナルトラスト運動について熱心に説明していたのを思い出しつつ、湖を巡った。

個展報告

20171206 木了俊介 写真展
「水 ～泡沫～」

at 沼津市・珈舎



20171214 菅田芳文 写真展
「ヨーロッパ アルプス」

at 静岡市・しずぎんギャラリー四季



20180119 芥川督康 写真展
「セピア色の輝き 1966」

at 富士フォトギャラリー銀座



■RPS本部の活動

RPS本部では、年数回行われる各レベルのディスタインクションの他、毎月テーマを設定し、会員から写真を募集しています。詳細はRPS本部HPよりご確認ください。

■編集後記

今回は著名写真家へのインタビューが実現。「写真展紹介」欄では著名写真家の写真展を取り上げていきます。「近況報告」欄ではメンバーのRPS以外の写真活動をご紹介します。(天海)